

理性と教養のある教育を目指して
—現代の若者のヨーロッパ観の一考察—

理性と教養のある教育を目指して —現代の若者のヨーロッパ観の一考察—

For Achieving an Aim in Better Education in Japan

東 海 周 二

Tokai Shuji

抄 録

戦後の日本の教育に大きく立ちふさがっている壁がある。文部省や文科省は、詰め込み教育の反省だと称して“ゆとり教育”の名のもとで失敗を重ね、語学に関しては実用英語の奨励と徹底との掛け声で、偏重気味だった文法を“疎外”。なぜ日本はこうも左右に揺れる振り子運動しかとれないのだろう。文法は言語を機能的にを知る究極の方法であるはずだ。英語教育に関しては、英会話やリスニング能力などは実用面の向上をもたらすが、知的なレベルのアップとは無関係である。ライティングのような高度なスキルは英文法の習得なしには実現しない。戦後の文化面でも敗戦を機にアメリカ万能のように追随した。その結果、日本文化の退廃とおびただしい非行や犯罪の増加。今こそ戦前の日本の良き文化を取り戻す機会である。それには、もう一度原点に立ち返り、日本に似たヨーロッパの長い歴史に根差した文化を再認識し、そこから知性と真のゆとりのある文化を見つけ出す時でもある。

キーワード：日本教育の再生

はじめに

もしも、である。日本の戦後の教育や文化がアメリカ偏重でなく、戦前のヨーロッパ重視の視点が残っていれば、これほど日本の文化は荒れていなかっただろう。

これは仮定法過去完了であり、空想することは無意味かもしれない。しかし、古き良き時代の音楽での文部省唱歌に見た、故郷の光景や味わい深い言葉遣いは消えつつある。かつての日本文化の落ち着きと優しさどこに行ったのだろう。音楽ばかりではない。中学や高校の英語教科書の題材では戦前や終戦直後のかぐわしい言葉や、深く根付いていた伝統文化からも目をそらし、現在の軽い文化がつとに増えているのは、けだし残念だが当然の帰結と言わざるを得ない。懐古趣味ではない。古典偏重というのではない。アップ・デートの話題は必須ではある。だが、英語教育においても「文法偏重」だと言って、近年、実用英語を極端に重視しリスニングや英

会話などの過剰な傾倒によってもたらされたものは何か。中学や高校で、英単語の綴りに窮する生徒や学生が急増したことは、現場にいる教職員がよく知ることである。

こうした風潮へのささやかな抵抗も込めて、古典的な文化を再考し、本当の意味の教養を根付かせるために、いま教材や講義に苦闘しつつ教育の再生を図っている。その一つが、英語教材である。上田女子短期大学総合文化学科の教壇で3年。毎年扱っているのは、ヨーロッパ関連の教材である。一面では保守的とも揶揄されるヨーロッパ。いまや軽佻浮薄といわれる現代の日本の風俗と文化。意味のない一発芸や芸の無い芸ノー人が跋扈している。かつてはそうではなかった。

日本映画の巨星・黒沢明監督が、当時の日本人の教養の薄さに閉口していた。現代の学生を含む若者で、彼を知る人は残念ながら少ない。例えば、欧米で高い評価を受けた作品『乱』は、ウィリアム・シェークスピアの4大悲劇の一つ『リア王』の日本時代劇版だったが、我が国ではヒットしなかった。それはシェークスピアの代表作を知る高校生や大学生が極端に減っている事にも起因する。5年前の調査でも、高校3年生でシェークスピアの代表作を知る者は1割にも満たなかった。黒沢明の葬儀に駆け付けた、スティーブン・スピルバーグ（ET など）やジョージ・ルーカス（スター・ウォーズなど）の作品は知っていても、この二人の有名監督の原点は、黒沢明にあったことを知らないのだ。だから、私たちが古き良き時代に目を向け、変わりつつある姿も直視し、ヨーロッパ文化の再生を目指すのはあながち無駄ではあるまい。

ヨーロッパの憧れの国

さてここに、本学学生のアンケートがある。講義をしている60余人のヨーロッパのイメージを垣間見ることができる。

訪れてみたい、ヨーロッパ3つの国のアンケート結果は次の通り（2014年7月実施）。

- ① イタリア 44人 ② フランス 41人 ③ イギリス 20人 ④ ドイツ 11人
⑤ オーストリア・スイス 各9人 ⑦ スペイン・フィンランド・オランダ・ベルギー 各7人 ⑪ スウェーデン 6人 ⑫ ギリシャ 4人 ⑬ トルコ 3人 ⑭ ポルトガル・デンマーク 各2人 ⑮ ポーランド・スコットランド・リヒテンシュタイン・バチカン市国 各1人

テレビのCMなどで頻繁に登場するイタリアが一位なのはうなずける。テレビ・コマーシャルなどによる料理やファッションへの関心が高いのは当然といえば当然。第1位として、挙げたのは19人だった。かつてオードリー・ヘプバーンの出世作『ローマの休日』の影響で、テレビの泉やスペイン階段、真実の口などの名所・旧跡をたどるという傾向は、いまでも健在であるとはいえ、かつてほどの衝撃はないようだ。従って今はローマよりもベネツィア、フィレンツェ、ミラノへの訪問志向が強い。

女性たちのあこがれのフランスが2位なのも同様。第1位に挙げられたのは、イタリアを凌ぐ24人。フランス料理やマカロンなどのスイーツが、古今東西を問わず、女性にとっては魅力となっている。

県内のある私立高校ではここ数年、パリを修学旅行先にして実施している。これに合わせて次のようなアンケートのデータがある（2014年2月実施。対象76人・（ ）内の数字は答えた生徒の数）。

（１）最も気に入った場所はどこですか。

シャンゼリゼ通り（9）、サクレクール寺院（9）オペラ座（9）、モンマルトルの丘（8）、ルーブル美術館（7）、ベルサイユ宮殿（6）、凱旋門（6）。ノートルダム寺院やパリの街並み、などが続く。

（２）行く前と行った後の印象の違いは何ですか。

「建物がキレイで素敵」（5）、「雰囲気（空気）や文化が全然違う」（7）のほか「カフェにいる人が多かった」や「思ったよりも生活が質素」などの回答が続く。

一方、ネガティブな意見も多い。ホテル滞在のために「野菜が少ない」や「トイレの汚さや落書きの多さ」を指摘する意見は6人いた。また「スリ」の被害にあった生徒もいて、スリへの恐怖を32人が指摘している。現在、世界的観光都市であるパリは、“スリ天国”になっていることは否めない。

（３）最も厭だった点は何ですか。

料理の味つけや差異を感じた生徒が最も多く、27人と傑出している。これはホテルによって異なるものの、食文化の違いは溝を埋めにくいことも確か。ゴミのポイ捨てやペットの汚物処理などに首をかしげる生徒も複数見られる。

（４）この旅行によって最も影響を受けたことは何だと思いますか。

「日本の良さや安全を再確認」が13人。しかし同時に「フランス人は自分の国の歴史などをよく知っていて大切にしている」（2）「パリは昔からの景観を大切にしておいて日本ほど異文化が入っていない。日本も自分たちの文化を大切にしようと思った」（2）「パリの人は心が豊かで日本人とは違う」「芸術や美について影響を受けた」（3）「挨拶の習慣がついた」など多彩な意見が寄せられた。

（５）授業などで触れられた外国、パリをはじめとするヨーロッパについて参考になることはありましたか。またそれは何でしたか。

ルーブル美術館をはじめとする絵画などの説明。『ナポレオンの戴冠式』を描いたジャック・ルイ・ダビッドが、ベルサイユ宮殿に複製を描き、その違いが分かった、などマニアックな指摘も見られる。ほかに『民衆を導く自由の女神』（ウジェーヌ・ドラクロア作）などにも触れている。むしろ『モナリザ』について言及している生徒も3人みられる。また、ノートルダム大聖堂の入口に掘られた、首のないサンドニの指摘もあり、しっかりと学習の成果が出た。

他にはヨーロッパでは日本やアメリカの一階が二階で、グラウンド・フロア（地上階）を意味する G がエレベーターなどでも確認できたことも収穫。

（６）短い旅行でしたが、パリで日本に関連するものがありましたか。

「日本食の店が多かった」と書いた生徒が9人。日本食が世界文化遺産になるなど日

本食への再評価が、パリなど世界主要都市でも高まっているのもうなずける。他には「日本のアニメが普及しているのを実感」という感想も5人いる。

(7) またパリに行きたいと思いますか。行きたいと思う人は今度は何を見たり何をしてみたいです。

「行きたい」が44人。「行きたいとは思わない」が19人。グループ行動やクラス行動で「オペラ座（ガルニエ）」を訪れた生徒もいたが、選択しなかった生徒の5人から「行きたかった」と残念がる意見も。ギャラリーもさることながらこの、シャガールの天井画は必見だという情報も得ていたようだ。さらに「ルーブル美術館の作品をゆっくり見てみたい」が15人。将来、再訪する生徒も出そうだ。『サモトラケのニケ』の像が修復中で見ることができず残念がる生徒も多くいた。

ニケの像は、台座を入れて高さ3.28メートル。古代ギリシャのロードス島の、当時の兵士がシリア軍と戦って勝利した記念に、BC190年ころ神殿に祀られたもの。発見したのはフランスの考古学者。無数の破片を組み合わせで現在のような姿に復元された。なぜ、これほどまでに生徒が関心を持ったかという点

①アメリカのスポーツ・メーカーで生徒にもなじみ深いナイキ（NIKE）の商標名がこのニケからとられており、ブーメランのようなロゴマークは、ニケの像の翼から来ていること。

②レオナルド・デカプリオ主演の『タイタニック』の映画で、恋人の女性と舳で、両手を広げる有名なシーンは、このニケの像を模したものである。このサモトラケのニケの像は、現在でも門外不出である。『モナリザ』や『ミロのビーナス』が来日した経験はあっても、ニケの像は今後も“出張”ありえないほど貴重であると、生徒は理解している。

なお、トム・ハンクスとオドレ・トトゥが主演の『ダビンチ・コード』（ダン・ブラウン原作）の映画の中で、パリ警察から追われ、ルーブル美術館から脱出するシーンでは、サモトラケのニケの像を背後に階段を駆け下るシーンは二人の勝利を見守る効果的なシーンとして演出されている。こうした知識も、現代の若者にとっては身近な存在になったことも知っておく必要があるだろう。

カフェ文化にも強い印象があったようで「いろいろなカフェの雰囲気味わってみたい」なども。ヨーロッパ文化の特徴の一つにカフェ文化があり、フランスにとどまらず、オーストリアやスイスをはじめイタリア・オランダなど多くの国で時間にとらわれず地元のカフェの味や会話を楽しむ習慣が、短大のアンケートにも見られるように「ゆったり時間を過ごしているイメージ」につながっていると思われる。実際、カフェから著名な作家や批評家など文化人が生まれたことは、周知の事実である。フランス革命でさえ、カフェを起点にして燃え上がったともいわれている。

自由に忌憚なく意見を交換できる場所がカフェだったからだ。

3位以降は、イギリス、ドイツ、オーストリアやスイス。ゲルマン系の国が続く。イギリス

はイングランドのイメージが強く、シャーロック・ホームズやハリー・ポッターのブームなどによる影響も見逃がせない。イギリスと言っても、イメージするのはイングランド。ブリテン島にある北のスコットランドはもちろんウエールズに至ってはその存在の知識は皆無だった。その西に隣接するアイルランド。北アイルランドを含めれば UK（イギリス連合王国）となるのも、誰一人知らなかった。7月にアイリッシュダンスの世界大会の模様や来日記念公演の予定のニュースを知って初めて関心を集めたほど。中には「こんな国があるとは知らなかった」と心情を吐露した学生もいる。

続いてドイツ、オーストリア、スイスとドイツ語圏に人気が集まる。ドイツは50代以上の年齢層では、ナチス・ヒトラーのイメージが色濃く、なかなか偏見が拭えずにいるが、若い世代では、EU 経済の牽引役を高く評価する学生も少なくない。それよりも、アウグスブルクからフュッセンにいたるロマンチック街道への憧れを抱く学生も多い。中でも、東京ディズニーランドのシンデレラ城のモデルとなった、フュッセンのノイシュバンシュタイン城をいつか訪れたいとする学生もいる。

スイスは、『アルプスの少女ハイジ』のイメージが強いのは、昔も今も変わらず。「永世中立」のイメージを指摘する学生もいる。時間の流れがゆったりするイメージのスイスに、慌ただしい今の日本に対する反動か「ゆったりと日向ぼっこをしているよう」だと表現する学生もいる。確かに8月に仲間と4度目のスイス訪問（16日間）を果たしたが、「車のクラクションを一度も聞かなかった」との指摘もあった。

オーストリアは、昔から日本との結びつきが強い。これを知ってか知らずか人気度5位は高評価。その中には『サウンド・オブ・ミュージック』の影響もあるようだ。いまでは古典的名画になったものの、映像や歌の素晴らしさに、強いイメージを持つ学生もいる。音楽好きには、モーツァルト、ベートーベン、シューベルトなど、ひきつけてやまない要素がある。

7位に入っている国では、フィンランドが異色。その理由は、サンタクロースのほかに、「フィヨルドを見てみたい」という学生。『ムーミン』の影響をあげる複数の学生がいる。同じ順位のスペインでは『水道橋』『フラメンコ』に惹かれる学生がいた。

偏見と無知に囚われているヨーロッパ観

「授業を受けるまでヨーロッパは古くて厭だ！ってイメージでした。でも歴史を知ると行ってみたいと思った。特にゴシック建築の教会がすごい」とか「今まであまり外国に興味がなく、どちらかというと怖いイメージ」との先入観を抱いていた学生も少なからずいた。これは多分に我が国に入ってくるヨーロッパ情報が、ギリシャ、イタリア、スペインなどの財政破綻やデモ・暴動などの映像などネガティブなニュースが多いからだとも言える。ヨーロッパを「遠い国」と指摘した学生には、一面、距離的な意味合いもあろう。アジア大陸を隔てて中東の向こう側に対峙するかのように思えるが「近い」と思えるアメリカ合衆国でさえ空路では共に12時間ほどで主要都市に行けるのは、大差なし。偏西風の影響もあってアメリカへは往きは11時間、帰りは12時間。反対にヨーロッパへは12時間だが帰りは11時間でほぼ同じ。

「遠い国」とする概念は、精神的・文化的な意味が含まれているようだ。ニュースにせよ映画にせよ、海外ニュースの8割がアメリカ関連、と言われている。学校で使われる英語にしても現在は英語ではなく米語になっている。実際、イリノイ州、ミズーリー州などアメリカ中西部の発音が基準とされている。英語の「秋」はかつての *autumn* から *fall* に。下着を表す *pants* は米語ではズボンになっているので、若者の間では「パンツ」という用語がズボンを意味するのは当然になっている。

アメリカ人が持つヨーロッパへの憧れとコンプレックス

世界をリードしていると豪語するアメリカにあっても、ヨーロッパへの憧憬や精神的劣等感の念はぬぐいがたく、アメリカの作家・ヘンリー・ジェームズ (1843～1916) はヨーロッパ文化に対する強烈なコンプレックスは生涯消えることがなかった。

彼はしばしば“傍観者的”と言われるが、その要因として、劣等感から来ていると指摘される。第一に、少年時代に植え付けられてきた兄ウィリアムに対する劣等感。優秀なる兄に対する劣等感、逆説的には兄に対する尊敬の念でもある。

第二に、ヨーロッパに対するアメリカ人としての劣等感。彼は、幼くして経済的に豊かだった父親に連れられて幾度となく大西洋を横断し、ヨーロッパ旅行に出かけている。最初の長編小説『ロデリック・ハドソン』を出版したころの19世紀の後半、パリでツルゲーネフやゾラ、モーパッサンら当時のフランス文学を代表する作家と知遇をえている。その後、ロンドンに旅先を移した。この時期に『デージーミラー』や『アメリカ人』などの代表作を著した絶頂期だった。その後あいついで母と父を亡くし、1883年にアメリカを去る。ロンドンに移って21年間もの間、アメリカに戻ることはなかった。

『アメリカ人』の中で、典型的なアメリカ人のニューマン。行動的、寛大さと善意、親切であると同時に自信過剰。物質的であり金の力を信じ切っているが教養のないこと。こうしたプラグマチズム的な性格のニューマンについて、筆者は冷やややかである。しかし、金の亡者の生活から、人生の意義を求めてヨーロッパに渡る。ここで妻とすべき理想の女性と出会い、古い貴族の仲間入りになるはずであった。しかし、このニューマンの言動に腹を据えかね、ついには婚約解消。婚約者の女性は尼寺に入ってしまう。ここで初めて富裕でありさえすれば、なんでも事が済むというアメリカ的な個人主義や合理主義が敗北することを知らされる。私たちが、映画などでよく見かけるアメリカ観である。ここには、成り上がりの、薄っぺらな傲慢さが見え隠れする。いや、あからさまな成金趣味によるプライドである。この例は極端なのかもしれないし、ヘンリー・ジェームズの文化史観は同じアメリカ人作家の中でも異色かもしれない。

第三は肉体的負傷による劣等感。青年時代に消火活動をしていて、背中にひどいけがをしたことによる負い目。性的不能者になったことが、生涯、女性を寄せ付けず、むしろ神秘化する傾向さえ見せてくる。ちょうどイタリア・ルネサンスの巨人ミケランジェロの青年時代に、彼の鼻っ柱の強さから、兄弟子にこっぴどく顔面を殴打され鼻梁が変形してしまったことから、女性へのコンプレックスとなって生涯独身を貫いたこと、そしてその反動で男女問わず、美男

(ダビデ像など)や女性像の美しさ(パチカンのピエタ像など)につながるものと酷似している。

ともかく、多かれ少なかれアメリカ人の対ヨーロッパ観は、反発というよりはむしろノスタルジックな心情が想起される。本来は、イギリスを去り理想郷を求めたピューリタン(清教徒)的社会づくりを目指したはずだが……。現実との大きなギャップに、このノスタルジーを強めさせたのかも知れない。この原点に私はシェークスピアの世界があると思う。『トム・ソーヤの冒険』『ハックルベリー・フィンの冒険』などをアメリカ文学の古典的名著の筆者マーク・トゥエイン(本名サミュエル・ラングホーン・クレメンス)でさえ、シェークスピアの影響を色濃く残す。例えば、前者の『トム・ソーヤの冒険』に登場する極悪人のインジャン・ジョーですら、死ぬ間際に極めて善人の持つ特性を出す等、善人は100パーセント善人、悪人は100パーセント悪人という図式を見せない。主人公のトムは、心優しい“やんちゃ少年”である。「善人は100パーセント善人で、悪人は100パーセント悪人」という図式で勧善懲悪の思想が当てはまらないのは、シェークスピアの世界観に根付くものだ。19世紀に活躍し『自然論』や『日記』で高い評価を受けたエマソンなどにもその匂いを嗅ぐことができる。

我が国では、中世・近世からずっと、ヨーロッパからの影響を受けてきた。高潔な人柄として名だたるフランシスコ・ザビエルとの接触、キリスト教の精神とは相いれずに幕府がとった鎖国の時代ですら、西洋の文化を意識させられた。それは、日本の武士道の高潔な精神構造と相通ずるものがあり、矛盾をはらみながらも、否応なく影響を受けてきた。

戦前の文化を美化する気はない。しかし、文化面でみれば、大正デモクラシーを含め、文化・文壇の指向は、先進国でありつつ、ソフィスティケートされたヨーロッパ文化であつたし、それはプラス面に働いたことは否定できない。文化面ばかりか、国土交通面の事情や医学などイギリス、ドイツ、オランダ、ポルトガルなどに影響されてきた日本。これを、日本古来の文化の破壊といった批判もある一方、ヨーロッパからも日本の伝統芸術や文化に感化されていた学者や文化人も数多くいた。ヨーロッパの中でも、独自の文化を持つケルト民族の文化。アイルランドやスコットランドなどに散在するケルト。この中からラフカディオ・ハーン(小泉八雲)など日本の地方に残る民話や伝説に取りつかれていった人物も少なくない。19世紀末に行われたパリ万博で出展された日本の浮世絵が、ジャポネスムとして、マネ、モネ、セザンヌやゴッホなど印象派に与えた衝撃は大きい。

自信に満ちた？ヨーロッパ人

ヨーロッパのイメージで最も多かったのは「自分に自信がありそう」という意見。他に「世界遺産がたくさんある」「古いものや伝統と共に生活している」「何人もの画家や彫刻家などを輩出して洗練されている」など。総じて、授業などを通じて学生が“食わず嫌い”だったことが伺える。ヨーロッパと日本。本来お互いの結びつきも強かった。EUの理念の原点にもなったハインリッヒ・グーデンホーフ・カレルギーは「欧州連合の父」と呼ばれている。その妻は日本人・光子。彼女は「EUの母」とも呼ばれている。その次男のRichardは名画『カサブランカ』の主人公リック(ハンプリー・ボガート)になっている。いつもクールで、さりとて無

機質ではない、胸の奥に深い愛情を見せるのは、日本の侍魂の権化であるとも目されている。

それではなぜ「軽薄」とも言われるアメリカ文化に傾倒したか。むろん太平洋戦争での敗北や GHQ のコントロールの影響が大だが、戦後の国土復興にアメリカ型経済の大量消費社会化に負うものではある。これはこれで良かった面はある。高度経済成長をはじめとする、急速な発展は大量のプチブルを生ませたし、飢えを無くすのには効果があった。しかし一方で成り振り構わないエコノミック・アニマル化も出た。それに伴って出てきた膿は、精神的にも大きな反動を生んだ。そして公害や出世主義。「大きいことは良いことだ」や「企業戦士」「働き蜂」のような本来の日本人の気質そしてヨーロッパ文化とは相いれない文化基盤が出来上がってしまったのだ。

ニューヨークの高層建築をまねるように、東京など首都圏では高さ比べである。しかし、パリでは、未だにエッフェル塔ですら、パリの景観を損ねる“厄介者”扱いになっていることも事実。高校生が軒並みに指摘した「街並みの美しさ」は、高層建築を拒むパリ市民のプライドでもある。ニューヨークの摩天楼を見て「すごい」という人はいても「美しい」とする観光客は少ない。ドイツの古都ローテンプルクなどは、戦時中の破壊から再興するのに、市民に基金を募って全く同じような、中世の姿を復元した。だからアメリカ人や日本人の観光客が大挙して押し寄せる。オーストリア・インスブルックのチロルの伝統舞踊やヨーデルのショーに中央を埋め尽くすのはアメリカ人観光客である。日本人も少なくない。その大半が中高年である。アメリカの文明に“毒された”若者の姿は少ない。だが、彼らも中高年になると疲れ果て、休息を求めやって来るのは、多くはヨーロッパである。自らのルーツをたどりに来るアメリカ人も癒しを求めて来たりするのだ。超競争社会から一時的に逃れに……。

忘れてはならないシェークスピア

通常の講義の中で、しばしばシェークスピアに触れることがある。今さら、という意見もあるだろう。しかしヨーロッパ文化を語るのには欠かせない古典であることを忘れてほしくない。『ハムレット』『オセロー』『マクベス』『リア王』の4大悲劇、『ロミオとジュリエット』や『ベニスの商人』『真夏の夜の夢』『から騒ぎ』など名前だけ憶えていても何もならない。シェークスピアの真の意図を知らねば意味のない戯言になってしまう。

芸人明石家さんまの長寿トーク番組だった『恋のから騒ぎ』でさえ背後にシェークスピアの肖像画があることを何人の視聴者が気付いているだろうか。シェークスピアが人生をシニカルに観察しつつ、そして悲劇の中に、「人間とはなんと愚かな者よ。失って初めてその大切さを知る」という、時代を超えて訴える普遍性を知った時、今の軽薄短小な社会に警告を発し、理性ある日本文化を取り戻すことにつながっていくのではないかと信じる。アメリカ的な勧善懲悪が全てではなく、悪の中に真実を見たり、正義の中にその脆さや危うさを見つける。

『オセロー』の中で、将軍オセローと奸計を企むイアーゴにその真理を発見する。人間の内面は、通り一遍では図れないものだ。そのためにも、ギリシャ神話やホメロスの『オデッセイ』などを含むヨーロッパの古典的名著をはじめ香しい文化を伝えていかねばならない。そうする

ことが、今の軽薄な”亜流アメリカ文化”、“アメリカ文化のコピー”と化している日本の文化から、重い日本の伝統文化を再生する一助になるだろう。

終わりに

学生のアンケートで「古いものを大切にする」「高い美意識を持っている」というイメージを抱いている意見も多々見られる。パリッ子の多くに、アメリカ人と日本人は「成金趣味」や「なんでも新しい物に飛びつく愚か者」という評価をされたことがある。その一方、日本の古典的芸能たる能や歌舞伎、柔道や大相撲、茶道・華道が高い評価を得ているのを見過ごしてはならない。日本で若者が熱狂するダンス甲子園などのくねくねした踊り。みなアメリカ文化のコピーである。一方、ヨーロッパではオーストリアを中心に社交ダンスは未だに若者の間で根強い。社交ダンスの聖地はイギリスのブラックプールだ。教え子で社交ダンスのプロA級で全日本王者に輝き、世界で活躍する恩田恵子さん（上田市出身）は「日本の社交ダンスのすそ野の浅さに愕然とする」と、日本の若者の嗜好の偏りを残念がる。草の根から作り上げたヨーロッパ文化と外国から『もらってきた』日本の文化の弱さを痛感させられる。今こそ、もう一度、アメリカよりもヨーロッパの文化を見直し、その中から日本のオリジナリティを作りだすべきだろう。「新しいものは良いものだ」というキャッチコピーが21世紀の今でも使われていることが寂しい。ドイツのダイムラー・ベンツ社の口癖—我々は何年も車のモデル・チェンジはしていない。良いものは変える必要がないからだ。

—私たちも、大量消費社会を終えて良きものを長く保つ、ヨーロッパ型の文化に変えて日本独自の美しい文化を再生ルネッサンス教育として再構築していきたいものである。

〈参考文献〉

- 秋山正幸著『ヘンリー・ジェームズ作品研究』（南雲堂） 1981年
谷口陸男編著『ヘンリー・ジェームズ研究』（南雲堂） 1977年
現代アメリカ文学選集 ヘンリー・ジェームズ「アメリカ人」の解説より （荒地出版社）
1968年
グーデンホーフ・カレルギー『ヨーロッパの統合』（鹿島研究所出版会） 1965年
大橋健三郎・斎藤光著『アメリカ文学史』（明治書院） 1971年
週刊長野連載『ヨーロッパ美の旅』

〈アンケート協力〉

上田女子短期大学総合文化学科 1・2年生
文化学園長野高校2年生（当時）